

目 次

— Table of Contents —

第7回SWYAA国際大会(ペルー大会).....	3
グローバルリーダー育成事業 事後活動連携強化プログラム	15
各国の事後活動組織の活動	25
7th SWYAA Global Assembly in Peru	37
Global Leaders Development Program Post-Program Activities Promotion Programs	51
Activities of the Respective SWYAA	61
資料編 (Appendix)	73

第7回SWYAA国際大会（ペルー大会）

2013年8月30日～9月2日(公式プログラム)
2013年9月3日～9月5日(オプションツアー)



第7回SWYAA国際大会

SWYAA国際大会の目的

- 1) 参加国や参加回の異なる「世界青年の船」事業の既参加青年が出会う機会を提供し、意見交換を通じて国際ネットワークの強化を図る機会とする
- 2) 既参加青年が訪問国の文化と人々を知る機会とする
- 3) 既参加青年がボランティア活動に参加し、社会貢献活動に参加する機会を提供する
- 4) 世界各国で実施されている事後活動について情報交換をする機会とする
- 5) SWYAA国際大会の開催や参加を通じてSWYAAの活性化を図る

概要

大会名称： 第7回SWYAA国際大会（第18回インターナショナル・リユニオン）

開催日程： 公式プログラム：2013年8月30日～9月2日
オプション・ツアー：2013年9月3日～5日

開催場所： ベルギー共和国

主催： 日本青年国際交流機構
ベルギー「世界青年の船」事後活動組織

同時開催： 「世界青年の船」事業事後活動協議会

参加費： 公式プログラムUS\$600（早期申込割引US\$450）
オプション・ツアーUS\$878（早期申込割引US\$750）

参加者： 108名（18か国）

第7回SWYAA国際大会は、ベルギー共和国で2013年8月30日から9月2日までの日程で開催された。9月3日から5日までの期間には、ベルギー文化体験をするためのオプション・ツアーが実施された。

第7回SWYAA国際大会の実施に当たって、ベルギー「世界青年の船」事後活動組織は、実行委員会を編成した。実行委員会で定めた役割分担に基づき、実行委員はいくつかの作業班に分かれて、様々な活動における視察先の選定から調整に至るまで、詳細な日程の準備を行った。作業班は以下のとおりである。

- 事後活動協議会担当
- 交通手段担当
- 食事担当
- オプション・ツアー担当
- 予約担当

活動日程

日付	時間	活動
公式プログラム		
8月29日(木)	終日	参加者到着
8月30日(金)	8:00 - 9:00	<朝食>
	9:45 - 11:00	アイスプレイキング
	11:30 - 12:30	オリエンテーション
	12:30 - 14:00	<昼食>
	14:00 - 17:00	事後活動協議会
	19:30 - 23:00	歓迎夕食会
8月31日(土)	7:00 - 8:00	<朝食>
	8:30 - 12:00	3コースに分かれての社会貢献活動
	13:00 - 14:30	<昼食>
	14:30 - 17:30	リマ市内の旧市街を散策
	20:00	リマ市内のミラフロレス地区を散策及び自由行動
9月1日(日)	7:00 - 8:00	<朝食>
	10:00 - 12:00	パチャカマック遺跡ツアー
	12:30 - 14:30	<昼食>
	14:30 - 19:00	ケブラーダ・ヴェルデ村にて地元青年との交流
		自由行動
9月2日(月)	7:00 - 8:00	<朝食>
	8:30 - 12:30	4コースに分かれての課題別視察
	13:30 - 15:00	フェアウェル・ランチ及び閉会式
オプション・ツアー		
9月3日(火)	6:50 - 8:15	クスコへ移動
	12:30 - 14:00	<昼食>
	14:00 - 19:30	クスコ市内散策、コリカンチャ、サクサイワマン、ケンコー、プカプカラ、タンボマチャイなどの遺跡を訪問
	20:00	フォルクローレショー及び自由行動
9月4日(水)	5:00 - 6:00	<朝食>
	6:30 - 11:00	マチュピチュへ移動
	11:00 - 14:30	マチュピチュツアー
	14:30 - 16:30	<昼食>
	20:30	ホテルへ移動
	21:00	<夕食>
9月5日(木)	5:00 - 6:00	<朝食>
	8:45 - 10:00	リマへ移動
		帰国

8月30日(金) 公式プログラム

第7回SWYAA国際大会(以下、GA)の初日、ペルーの首都リマに18か国から集った108人の参加者は最初の公式プログラム、アイスブレイキングに参加するために「展示公園」と呼ばれる市内の大きな公園へ移動。五つのチームに分かれ、紙に書かれたすべての指示をどのチームが一番早く終わらせることができるか、というSWY-Questと名付けられたアクティビティを行った。ヒントを基に問題の答えを公園内で探し、与えられたお題の写真のポーズを協力して撮るなど、初対面の参加者たちが楽しくコミュニケーションを取りやすいように工夫が凝らしてあり、随時笑顔が絶えないアクティビティであった。



その後、日秘文化会館で行われたオリエンテーションで、GA実行委員の紹介の後、スケジュールや注意事項の確認をした。昼食には日本食のお弁当が配られ、昼食後には同会館にある日本人ペルー移住史料館や日本庭園を自由に見学する者もいた。多くの既参加青年にとっては久しぶりに日本を感じる機会となり、また、海外で日本文化がどのように紹介されているかを学ぶことができた。

午後の開会式では、SWYAAペルー会長のJaime Sotomayorと日本青年国際交流機構の大河原友子会長によるスピーチ、内閣府の大部沙絵子参事官補佐による「世界青年の船」事業(以下、SWY)の継続についての説明の後、事後活動協議会が開催された。

事後活動協議会では、6人の既参加青年がそれぞれ実施している事後活動のプレゼンテーションをした。プレゼンテーションの内容は以下の通りである。

1. SWY KIVAプロジェクト

発表者: Emma Wooldridge (SWY15 オーストラリア)

SWYオーストラリアでは、クラウドファンディングを利用したマイクロファイナンスの活動(インターネットを利用し、貧しい人々に小口の融資などを提供する)を行っている。SWYネットワークを利用して、これまでに737回、計A\$22,000以上のローンが提供された。全世界が対象であるが、SWYオーストラリアでは主にSWY参加国を支援している。(詳細はp.26オーストラリアの活動報告を参照)



2. ちえれめいれプロジェクト

発表者: 渡部清花 (SWY24 日本)

入植者に土地を奪われたバングラデシュの先住民族の子供たちに対する教育支援や里親探しとフェア・トレードを実施。里親支援では地域と世界のつながりを重視し、バングラデシュの子供たちの現状を伝え、コミュニケーションを取れるようにしている。フェア・トレードでは手織りの布を販売しているが、ウェブサイトで宣伝し、織物から収入を得られるようにするだけではなく、バングラデシュの人々が世界とつながるきっかけ作りもしている。



3. 青年交流プログラム - Island Leaders at Heart

発表者: Ramon Narayan (SWY16, 24 ニュージーランド)

ニュージーランドに移住してきたポリネシアの青少年は、少数民族であることなどから、孤立・孤独感を感じていることが多く、自信を失っている者も少なくない。SWYAAニュージーランドはSWYAAトンガと協力して、地元のニュージーランド人の青少年とポリネシアの青少年の交流や活動の場を設けることで、彼らに自信をつけさせる活動を実施している。BBQや映画鑑賞、ダンスなど様々なアクティビティを通して異なるアイデンティティの間の「絆」を深めている。



4. Learn Live Loveプロジェクト

発表者：Alexandra Gutiérrez, Paul Hoyle (SWY24 ペルー)

ラテンアメリカやヨーロッパの数か国が共同で実施しているボランティア・プロジェクト。貧困と社会的疎外を無くすことを目的とし、教育、就職そしてボランティアをサポートする活動を行っている。SWYAAペルーでは、ボランティアを推奨するツアーをリマで開催。ボランティアを通して地域のつながりのみならず世界と「かかわり」を持つ意味や重要性を説き、実際に複数のプロジェクト(地元の学生とダンスで交流、清掃活動など)を実施した。



5. プロジェクト・ロマス

発表者：Diego Padilla (SWY21 ペルー)

リマの一角にある、ロマスと呼ばれるその土地特有の生態系を守り、自然や環境の尊さと社会との関係の重要性に対する理解を広める活動。科学的・技術的な面からの研究のみならず、ロマス地域に住む青少年と共に学校や地域で様々なプロジェクトを行い、社会全体への理解を広める活動を実施している。発表者は「世界青年の船」事業への参加をきっかけに、このような活動を始めた。



6. 御縁 マラカイボ

発表者：Stephanie Chacin, Carlos Diaz (SWY24 ベネズエラ)

「世界青年の船」事業への参加をきっかけに始めたベネズエラのマラカイボ市と日本との文化の懸け橋になるための活動。主に語学研修や日本の伝統的な遊び、将棋や花札の楽しさを広めたり、ソーラン節を地元民と一緒に踊ったりして交流を深める。文化交流だけではなく、昼食会やチャリティ活動、地元の子供たちのサポートを含めた活動を通して、700人以上の人々が日本文化に触れた。



この六つのプロジェクト以外にも複数のプロジェクトがポスターを使って発表された。様々な事後活動が発表されたが、活動に対する強い気持ちがありながらも、たくさんの人を活動に巻き込むこと、続けていくことの難しさや重要性を強調する場面が多かった。そして、どのプロジェクトも地元密着型の活動でありながら、地域と世界との絆やつながりを重要視している活動であった。これらが「世界青年の船」事業の事後活動の特徴であり、SWYの精神が共通点として反映されている。発表の後は、パネルディスカッション形式で質疑応答となり、それぞれの活動に対する理解を深めた。また、パネルディスカッション終了後には、活動に協力したいと積極的に申し出る者の姿も多く見受けられた。



事後活動協議会の後半は、SWYAA国際連盟の新しい憲章についての説明、第25回「世界青年の船」事業で実施された日本における寄港地活動や日本参加青年の海外派遣の報告があり、最後に集合写真を撮影して会議は終了した。



会議後は一旦ホテルへ戻り、その後、歓迎レセプションの会場であるラ・ロサ・ナウティカ海上レストランへと向かった。SWYAAペルーのJaime Sotomayor会長と日本青年国際交流機構の大河原友子会長からのスピーチ、ペルー政府Eda Rivas外務大臣のあいさつ文が外務省を代表してAmbassador Maria Cecilia Rozasから読まれ、日本側は森まさこ内閣府特命担当大臣のあいさつ文が大部沙絵子参事官補佐より代読された後、福川正浩特命全権大使によるスピーチで締めくくられた。記念品の交換と乾杯の後は、すばらしいペルー料理を堪能し、合間に行われたショーを楽しんだ。沖縄の伝統芸能のエイサーやペルーの伝統的なダンスが地元青年（特に日系ペルー人の青年）により披露され、途中からGA参加者もダンスに加わった。ラテンの音楽に身を包まれ、ダンスの得意・不得意に関係なくすべての参加者がダンスフロアに出て楽しんだ。レストランで働く従業員から「人種や国籍に関係なく、たくさんの青年が一緒に楽しんで踊る光景は新鮮で不思議だが、とてもすばらしい。」と言われた青年もいた。忘れられない夜を過ごし、GA一日目は終了した。

8月31日（土）公式プログラム

朝食後、ホテルロビーに集合。前日の歓迎レセプションでかなり打ち解けた様子の参加者は、各々が選んだ社会貢献活動の訪問先へのバスへと分かれて乗車した。

社会貢献活動 Aprendo Contigo

Aprendo Contigo（和訳：共に学ぶ）という団体の活動地である国立小児病院を訪問した。この団体は入院していて学校に通えない子供たちのために、遊びと学びのプログラムを提供している。学校に通えない期間が長いと、その後の授業への復帰が難しく不登校を生む原因にもなってしまう。2000年に10人のボランティアから始まったこの活動は、現在、240人を超えるボランティアが3か所の活動地で500人以上の子供たちをサポートしている。政府からの資金援助は受けず、ボランティアと一般の寄付で活動を展開しているのが特徴。今までに5万人以上の子供がこのプログラムの恩恵を受けてきた。また、ボランティアで参加した学生たちが社会活動や福祉に興味を持つようになってきた、という成果もある。

参加者は自国を紹介できる写真等を用意したり、折り紙やおもちゃで遊んだり、踊ったり歌ったり、互いの言語でのあいさつを教え合ったりと、子供たちの障がいや病気の程度、年齢に合わせて交流を深め、充実した時間を過ごした。（感想：SWY24 渡部清花）

社会貢献活動 Lulay

800人の0歳から19歳以下の子供たちが共同生活を

している施設で、その一部の子供たちと大きなグラウンドで、ボール運びなどのゲームや阿波踊りやソーラン節などをして交流した。印象的だったことは、バスを降りた瞬間から、子供たちから歓迎のキスを受け、抱きしめられたことだ。言葉は通じなくても、私たちの訪問を待ちわびており、心から受け入れてくれる気持ちを感じた。ここで活動をしているLulay（ケチュア語で「構築」という意味）という団体は、20名弱の大学生からなるNPOで、代表のJoseが高校在学中に作ったボランティアサークルから始まった。彼らは貧困を救うための一つのステップとして、青少年の考え方を変えていこうと、月に1~2回現地を訪れ、様々な活動やワークショップを通じて青少年の自尊心を高めるための活動している。今回の訪問を通して、貧困を克服し、希望を持てる未来の構築のため青年育成を行っているLulayに感謝すると同時に、今後更なる活動の発展をサポートしていきたいと感じた。

（感想：SWY24 原園理沙）

社会貢献活動 Proyecto Lomas

リマのワカ・フォルタレザ・デ・コンポイ遺跡を訪問した。そこは、西暦1000~1470年にイチマ文化が栄え、その後インカが再統治し西暦1470~1532年にインカ文化が栄えた場所である。1998年に国民文化遺産に登録され、考古学的に重要な地域だが、うまく保全が進んでいない。既参加青年のDiegoが活動しているProyecto Lomas（ペルーの自然と歴史を保全する団体）の協力の下、遺跡周辺のゴミ拾いと遺跡の通路の石のペンキ塗りをした。遺跡の周りに民家があり、公共のゴミ箱が設置されておらず、見張りもないためゴミが遺跡周辺に散乱していた。ゴミはビニール類を始め生活用品が多かった。以前はもっとひどかったと聞いたため、少しずつではあるが歴史の保全が進んでいるのだと感じた。ペンキ塗りでは、通路の両脇の石に目立つように白ペンキを塗った。勝手に遺跡の中に入らないようにするためのだが、残念なことに遺跡には、多数の落書きがあった。日本でもそうだが、遺跡を守るためには仕組みとしての保全と、意識の改善も必要だと改めて学んだ。また、大学生などの若者たちがペルーの文化・歴史を保全していこうと積極的に活動していることに刺激を受けた。（感想：SWY21 塚田賢治）



施設訪問後、リマ旧市街にあるレストランへと向かった。昼食はインカ時代の遺跡「ワカ」があり、歴史を感じられる雰囲気の中でペルー料理を堪能した。参加者は訪問先での感想・意見交換やペルー料理についての話題に花を咲かせていた。その後、旧市街にあるアルマス広場へと徒歩で向かい全員で記念撮影をした。ここは、教会や博物館、大統領府など重要な建物が多くあるため、観光客や地元の人々で大変賑わっている地域である。その旧市街をペルーの既参加青年による案内で、「教会ツアー」「歴史ツアー」「ビスコツアー」の3班に分かれて見学した。

旧市街ツアーの後、ホテルに戻り少し休憩し、夜は旧市街とは全く違うモダンな雰囲気の中で海岸沿いにあるミラフロレス地区での徒歩ツアーと自由時間を楽しんだ。

首都リマはコロニアル時代の古い街並みからモダンな街並みまでがある大都市である。そのリマを少し離れたと貧困層が暮らす地域がある。各地域が全く違う表情を持っており、国民の経済レベルによって住む地域が分かれている印象を受けた。ペルー経済の急成長を感じる一方でこの国が抱える社会問題も知ることができ、「社会貢献」を目的として集まった参加者にとっては「自分ができることは何か」を考えさせられる一日となった。

9月1日(日) 公式プログラム

午前は首都リマの南に位置するパチャカマック遺跡を訪れ、神殿やピラミッドなどの歴史的建造物を見学した。現存する遺跡は三つのみだが、最盛期には約20ものピラミッドが建てられていたと言われている。また、遺跡内には東西南北へと延びる道路が残されており、かつてはコロンビアやチリなど周辺国を結ぶ交通の要衝として栄えたという。スペイン人の上陸前に繁栄したりマ文明やインカ文明を肌で感じる事ができた。

昼食はペルーの伝統的なダンスを見ながら、ペルー料理を堪能した。ダンスは、色鮮やかな衣装を着た女性が舞ったり、男女の掛け合いが印象的だったり、実に様々で楽しいものであった。ペルーは沿岸地域、高山地域、密林地域と大きく三つの地域に分かれており、それぞれの地域で文化が発展したことによって、多様な文化が育まれたようだ。そうした文化の多様性を感じる時間となった。

午後には、パチャカマック地区の山岳地帯にあるケブラダ・ヴェルデという村を訪れ、記念の植樹をした後、地域の青年たちと屋外での障害物競争などのアクティビティを通じて交流した。GA参加者のみならず、地元の人々との交流を図ることができ、非常に有意義な時間となった。最後には、地元青年を代表してジョナサンからGA参加者に、訪問の記念として苗木が贈られた。「私たちの友好関係のように、これからこの苗木が育っていくよう願っている」というジョナサンのコメン

トが大変印象的であった。また、GA参加者からコミュニティに対し、ステレオコンボが贈られた。ペルーの歴史や文化に触れるとともに、現地の人々との交流を深める機会も得ることができた、非常に印象深い経験をした一日であった。



9月2日(月) 公式プログラム

午前中は「ビスコ」「ペルー料理」「ペルー音楽」「伝統工芸」のうち、それぞれ興味のあるテーマに分かれて文化体験をした。

課題別視察 食文化：ビスコで乾杯！

ペルーを代表するお酒、「ビスコ」の酒造会社 Fundo San Lorenzo を訪問し、社長よりビスコの歴史やビスコを使った代表的なカクテル「ビスコサワー」の作り方の説明を受けた。ビスコはぶどうを蒸留して作ったアルコール度数が42度前後の酒で無色透明に近い飲み物だ。飲んだ時の口あたりは非常にまろやかだが、体内で燃えるようにかつとなる点はウォッカに近いものがある。名前の由来は諸説様々だが、ビスコを入れる瓶の形と神々の使いとされるビスコと呼ばれる鳥の形が似ていたという説が有力だ。会社は決して大きいとは言えず町中の中小企業という感じであったが80年以上の歴史が良い雰囲気を醸し出していた。地元のバーで働く現役のバーテンダーを招き、シェイカーにビスコ、卵白、レモン、シロップ、そして砕いた氷を注いで30秒ほどシェイクして「ビスコサワー」を作った。日本の酒蔵のように、地元で昔からある小さな会社が酒造りを支えているのは世界共通だと感じた。(感想：SWY22 丹治亮介)



課題別視察 食文化：ペルー料理を作りますか？

ペルーの食文化を体験するガストロノミーコースは、まずリマにある歴史的な市場であるヘスス・マリア地区マーケットを訪ねた。ペルーの実行委員たちの案内で、観光目的ではない日常生活に必要な食材を売るマーケットを見学することができた。見たこともないフルーツの数々や芋の種類だけでも200を超えるという豊富な食材に驚くとともに、参加者は実行委員を通じて店の人たちに質問をしたり、それらの食材を買って食したりする機会を得た。ここで買えるフルーツは大変安く、また地元の人たちが食事をしたり、買い物をしている姿を見ることができた。今回のプログラム全体を通して言えることだが、地元ペルーの実行委員は誰もが自分の文化に関して広く深い知識を持っている。家庭環境、学校教育、地域育成などを通じて地元文化を惹き、後世に伝えていく体制が整っているからなのだろうか、と興味深く感じた。

マーケットからバスで移動し、いよいよ料理体験となった。シェフがスペイン語で丁寧に説明する内容を実行委員が英語に通訳してくれ、ここでも様々な質問が飛び交った。主に料理に使う食材についての質問が多かった。今回習ったペルーの代表的料理は以下の三種。

カウサ (Causa) : パパマリアヤという黄色い芋と鶏肉で作った前菜

セビーチェ (Ceviche) : 魚介類のマリネ

ロモサルタド (Lomo Saltado) : ハーブをたっぷり使ったペルー風野菜と肉炒め

それぞれの料理を試食したところ、レモン(ライムに似ている)などをたくさん使いすっきりとした味だが、ハーブや香辛料などで素材の味わいがより深くなり、どの国の参加者にも好評だった。この体験を通して、ペルーの食材の豊富さと料理のアレンジの幅広さを学んだ。また、たくさんのフルーツや野菜の元祖がペルーにあることも勉強になった。

(感想：SWY12 ローレンス道子)



課題別視察 ペルー音楽：ペルーの楽器で踊りましょう！

建物に入ると、民族楽器のカホンが並べられており、その奥の部屋には民族衣装が机の上に並べられていた。全員でペルーの民族ダンスについて説明を受け

た後、2グループに分かれて、民族ダンスの講義と実技、そして民族楽器の講義と実技を受けた。

<民族ダンスについて>

ペルーは土地が広く、それぞれの土地のダンス、音楽、衣装がある。ダンスには様々なステップがあり、そのステップのいくつかを教わった。衣装の試着では、思い通りの衣装を試着し、写真撮影をした。多くの歴史を経てきた今、民族の踊りや衣装がきちんと伝えられていて、それを見たり体験したりできたことに感謝した。

<民族楽器について>

四角い箱のような物が打楽器のカホン。その上に直接座り、前面を叩くと響く音がある。叩く場所によって音の高低があり、日本の太鼓のようだが、叩く面の後ろ側の面に丸い穴が開いているところはバイオリンのようだった。実際に叩いてみて、リズム一つ取っても独特のリズムがあるように感じた。パーレーンの参加者たちは「パーレーンのリズムに似ている点、違う点」をみんなに教えていた。それぞれがとても楽しそうに自国の音楽について話し合い、練習している様子を見て、幸せな気持ちになった。色々なリズムの叩き方があり、教えてくれたペルーの既参加青年が聞かせてくれた音楽は、カホン一つで音の世界に引き込まれるようだった。カホンが気に入った多くの参加者は、今回使用したカホンを購入し、それぞれの国まで持ち帰った。かなりの大きな荷物になったが、それ以上に、すてきな思い出になったと思う。これほどすてきなプログラムを企画してくれたペルーの既参加青年の皆さんに感謝する。ありがとう！

(感想：SWY12 池尻奈美絵)



課題別視察 伝統工芸：工芸品を作らしましょう！

町の陶芸工房であるArte Wari Peruを訪問し、初めにカストロ社長より工房の成立ちの話を伺った。社長は子供の頃から土を用いて物を作ることが好きで、インカ帝国時代より300年以上前に栄えていたワリ文化の中心地で育ったこともあり、ワリ文化によく見られる模様や形を再現する作品を作っていた。成人してからは、若者にスキルや伝統工芸を学ぶ場を提供するとともに、後に、彼らが独立してからも生計を維持していけるようにワークショップ兼仕事場をリマ市に構えた。地元の若

者たちがこの工房で育って、独立していくことが誇りだという社長の言葉に心を打たれた。ここで作られた作品は、市内のマーケットや全国の土産物店に卸されている。ペルー観光局の協力の下、ペルー伝統文化を維持継承し、更に外国へ作品を輸出し文化紹介を行っている。説明の後に、それぞれの工程(成形、絵付け、窯、乾燥部屋、ショップ)に分かれた工房内を見学し、若者が細かい手作業に熱心に取り組む姿を見た。我々が体験したワークショップでは、素焼きの作品に思い思いの絵付けをほどこし、出来上がった物は土産として持ち帰ることができた。工房で買い物をした後は、市内のインカ・マーケットへと移動し、ペルー伝統工芸品の買い物の時間が設けられた。(感想:SWY14 所司圭穂理)



課題別視察でそれぞれ文化体験をした後、ペルー既参加青年のGuillermo Aliagaが経営するレストランに集合し、閉会式が行われた。

閉会式では、既参加青年たちによるパフォーマンスの後、SWYAAペルーのJaime Sotomayor会長と日本青年国際交流機構の大河原友子会長によるスピーチがあり、日本青年国際交流機構からGA実行委員会にギフトが贈呈された後、SWYAAペルーから参加者全員に参加証が渡された。また、来年のGAはトルコで開催されるという発表がされて閉会式が閉幕するとともに公式プログラムは終了した。

9月3日(火) オプショナル・ツアー

オプショナルツアーの参加者は午前4時近くにホテルを出発し、リマ空港から約1時間のフライトでクスコ空港へ到着。機内からは雪景色のアンデス山脈が見え始めこれからの旅を期待させた。

クスコは11~12世紀頃インカ帝国の首都として建設されケチュア語で「ヘソ」を意味する。クスコは標高3,660メートルと富士山の上に街があるようなもので、高山病にかかる人も少なくない。参加者の多くは前日から高山病の薬を飲んでいて、現地ではココティーが飲まれており、コカの葉を5~6枚カップに入れお湯を注ぐという簡単な物だが、高山病に効くと言われている。ロビーには酸欠になった時のための大きな酸素ボンベも置いてあった。朝の集

合が早かったので到着後、体を横にして休ませることが大切と言われ、2時間程休憩し、12時に再集合した。

午後からインカ文明において政治、経済、文化の中心地であったクスコの観光となった。インカには強固な石組の技術があった。スペイン統治時代にはその石の上にスパニッシュコロニアルの建築物が建てられたので、二つの文化が作り上げた独特の雰囲気がクスコを魅力的な街にしている。

街の中心にあるEl Trucoというレストランで昼食後、サント・ドミンゴ教会、別名コリカンチャを見学。土台の石はインカ時代の物で、インカ時代には「宮殿」の名の通り太陽の神殿として光輝いていたという。その後、インカの足跡を巡り、ウルバンバの美しい聖なる谷を訪問。そして、サクサイワマンというインカ軍2万人がスペイン人と戦った要塞跡、ケンコーというインカ帝国の祭礼場、プカブカラという見晴らしの良い高台に建つ赤い土がある遺跡、タンボマチャイという「聖なる泉」とよばれたインカ時代の沐浴場などを見学した。

夕食はDon Antonioレストランで、音楽と踊りで盛り上がるfolkloreショーを見学しながらペルー伝統料理をいただいた。

9月4日(水) オプショナル・ツアー

朝6時半に集合。バスで約30分のところにあるボロイ駅からマチュピチュ村にあるアグアス・カリエンテス駅まで約3時間の電車の旅となった。山々に囲まれたワロコンド川沿いの絶景を進む「ビスタ・ドーム」という名の電車は、その名の通り天井が窓になっていて、遠くには雪を冠したアンデスの山々が連なる美しい景色を優雅に楽しめる。オリヤンタイタンボを過ぎた辺りからはウルバンバ川沿いを走る。どこを見ても絵になる風景だった。

駅からはシャトルバスでハイラム・ピンガムロードと呼ばれる曲がりくねった道を30分程登り、いよいよ期待のマチュピチュ遺跡へ向かった。まず、遺跡のすぐ手前にあるSanctuary Lodgeにて昼食。寒ければ0度くらいになると言われていたので、何重にも洋服を着込んでいた者もいたが、幸運なことに太陽の日差しに恵まれ、とても暖かった。

午後1時半、参加者全員の憧れだったマチュピチュへ。何度となく写真では見たことのある空中都市が目前に広がる光景に、世界中から集まった参加者が感動を共有した。



マチュピチュ遺跡はケチュア語で「老いた峰」を意味するマチュピチュ山と「若い峰」を意味するワイナビチュ山に挟まれている。インカ文明では石造建築技術が大変進んでいたが、経済基盤は農業であった。アンデスには「コスタ」「シエラ」「セルバ」の三つの異なる季候地域があるため、この個性的な三地域が相互依存していた。また、アンデス世界では、いかに資源を公平に分配でき、エネルギーを有効に活用できるかが豊かさの指標であった。そのため、社会的弱者を社会全体が守る仕組みや計画的な生産システムと充実した社会保障制度があり、飢えや貧困もない理想のユートピアとも言える社会システムが確立されていたようだ。文明の進んだ現世でも叶わぬ理想のシステムを13~14世紀に実現していた文明、それにしても険しい山の上に空中都市を建

設したのはどういう意味があったのであろうか。文字を持たなかった文化ということで未だ多くの謎に包まれたアンデスの歴史へのロマンは深まるばかりだ。世界遺産マチュピチュを目の前にしてもその場にいる事実が信じられない気分。この地にいたのは夢でなかったと証明できるように、皆写真をたくさん撮っていた。興奮冷めやらぬまま、バスと電車を乗り継いで、クスコのホテルに戻った。最後の晚餐はSamay Hotelでのピュウフェディナー。ラテンの音楽と踊りで盛り上がった。

9月5日(木) オブショナル・ツアー

朝6時半に集合、クスコよりリマ空港に戻り、オブショナル・ツアーは解散となった。

日本青年国際交流機構会長からのコメント

大河原 友子

ペルー日本外交関係設立140周年を記念するこの年に、第7回SWYAA国際大会がペルーで開催されたことを大変光栄に思います。

初日に行われた事後活動協議会では、様々な分野や対象に向け多くの青年たちが「世界青年の船」事業での学びをいかし、世界中で独自の活動を展開し広く社会貢献活動に取り組んでいる状況が報告されました。「世界青年の船」事業は、短期間に劇的に個人を成長させる素晴らしいプログラムです。経験を個人のレベルに留めておくのではなく、成長した参加青年がリーダーシップを取り、更に多くの人を幸せにする活動を起こしていることが、この事業の何よりの成果であると確信しました。今回の発表はほんの一部に過ぎませんが、多くの参加青年たちに刺激を与え、新たなアイデアや企画が生まれるきっかけになったことでしょう。

歓迎夕食会には、福川正浩日本国大使や日本ペルー協会の山城晃会長、ペルー政府からはAmbassador Maria Cecilia Rozasの御臨席を賜りました。Rozas氏のお嬢さんは「世界青年の船」事業の既参加青年であり、その日の司会役でした。Rozas氏はお嬢さんを通してこの事業のことを熟知しており、世界の青年をつなぎ「平和

を象徴」する素晴らしいプログラムだと高く評価されました。会場では、余興の一つとして沖縄太鼓が披露されました。地球の裏側でこのように日系人及びペルー人の間で日本の伝統文化が受け継がれている姿を目の当たりにし、感動で目頭が熱くなりました。また、国際大会ではボランティア活動、視察、料理、ダンス、アートなどペルーをより良く理解するための様々な工夫がされており、地元の人々との交流等も通して単なる観光旅行では決して体験することのできない貴重な時間を過ごすことができました。参加者同士が新・旧の出会いの中で互いの事後活動の情報共有や今後、自分たちにできることの意見交換をする機会も多くありました。楽しい時間を共有しながら時には真剣な話をすることによって友情の絆が深まっていくことを感じました。相互理解を深め「世界青年の船」事業のネットワークを広げ、社会貢献の意義を再確認する国際大会の目的が十分果たされ大成功に終わりました。これもひとえにペルー政府の御協力、Jaime Sotomayor会長を始めとする実行委員たちの献身的なホスピタリティと実行力のお陰です。心より感謝申し上げます。

ペルー「世界青年の船」事後活動組織会長からのコメント

Jaime Sotomayor

2012年1月、第24回「世界青年の船」事業ペルー共和国団の一員となる素晴らしい機会を得た際、船内で既参加青年からこの国際大会という素晴らしい事後活動についての話を聞きました。新しい国を知り、既参加青年と出会い、共に取り組む事後活動について議論することは、まさに自分が求めているもののように思えました。事業を終えて帰国した私たちは、自分たちの夢を実現し、第7回SWYAA国際大会をペルーで実施するべく、事後活動組織のメンバーと力を合わせて取り組みました。

私たちは国際大会の運営が容易ではないことを知っていました。これまでの国際大会の企画と活動についての話から、同じレベルに到達するには並大抵の努力では及ばないことは明らかでした。

まずSWYAAペルーは、ボランティアを募り、国際大会運営チーム（以下、GAチーム）を結成することから第一歩を踏み出しました。大会の運営に当たり、各自がそれぞれの責任を与えられました。それらは交通手段担当、食事担当、オブショナル・ツアー担当、予約担当など多岐にわたりました。各自の進捗状況を全体ですり合わせるために、頻繁にミーティングを重ねました。私たちはこの大会がビッグなものになりつつあることを日々、感じていました。

このGAチームの重要メンバーとしてIYEOがありました。IYEOとは常に連絡を取り合い、協力し合いました。大会最終日にIYEO事務局の齋藤珠恵さんが口にした「毎日のメール交換がなくなると寂しくなるわ」という言葉どおり、私は目覚めたときにIYEOからのメールが届いていない状況に、未だに慣れることができません。

国際大会が発表されるに先立って準備を始めた時点では、時間はたっぷりあるように思えました。しかし、この時間を最大限に活用しなかったのは愚かでした。なぜなら大会が近づくにつれ、すべきことがまだまだあることに気付いたからです。大会の二週間前には、GAチームは頻繁にミーティングをしすぎたため、企画のために集まるだけでも十分、社交イベントでは顔を合わせたくないというほどでした。もちろん、これは良い意味であり、私たちはミーティングでは素晴らしい時間を過ごしました。

ついに大会当日となり、大会参加者が到着し、準備してきたすべてを実行する時が来ました。GAチームはな

すべきことを心得ており、計画に従って動きました。GAチームのメンバーが空港に出迎えに行き、ホテルではチェックインなどの手伝いをしました。それからの数日間、私たちは数か月前にはアイデアにすぎなかったことを実行していました。それはまさに大仕事でした。

国際大会をやり遂げた今、本大会を計画し、実施するためにペルー共和国既参加青年と共に過ごしたすべての時間が、私たちの絆を深める機会となりました。とりわけ、これまで協力する機会がなかったメンバーとの絆が深まりました。私たちはまるで全員が同じ回の参加青年同士のように感じるようになりました。このようなイベントは、事後活動組織を強化する素晴らしい機会です。なぜならば、大会運営の中で起きた良いことも悪いことも、私たちの心を開かせ、親密になるのに役立ったからです。

国際大会は、今後に伝えたい教訓を多く私たちに残しました。一つ目は、物事はなるべく迅速に片付けるのがベストだということ。出来る限り早く決定し、予約し、調整すること。そうすれば次に現れる新しい物事に取りかかれます。やるべきことは次々に現れるのです！本当です。仕事の大小にかかわらず、なるべく早くそれを終えて新しいことに取りかかる必要があります。そのためには古いことをやり終えておかななくてはなりません。

このことは、国際大会を企画する際に重要な、別の側面をもたらします。残り時間がなくなり、国際大会の日が近づくにつれ、物事を決めるプロセスが「全員の意見が一致しなければならぬ」から「今、決めなければならない」へと変化します。意志決定の際にはこのような変化が必要ではありますが、チーム全員の意見を考慮し、決定をうまく伝えることも重要です。私たち全員が企画に参加し、喜びをもって協力していることを忘れてはなりません。これは、私たちが苦勞して学ばなければならなかったことでした。

要は、国際大会を企画することは素晴らしい挑戦であっただけでなく、GAチーム全員に大きな満足をもたらしました。その過程では様々な失敗をしましたが、私たちは解決策を学び、先へと進んでいきました。このようなイベントの運営の一番重要な点は、私たち全員が結束を固め、社会に大きな変化をもたらせられるようになることなのです。

SWYAAペルーは第7回SWYAA国際大会をペルーで開催させていただいたことを誇りに感じています。大会の主催国に選ばれたと知った時、このような重要な大会の運営に挑戦するという喜びに、私たちの胸は高鳴りました。

この新しい経験を通じて、参加年度も背景も異なる事後活動組織のメンバーと出会うことができました。そして、公私にわたる経験を共有し、協力してプログラムの運営と実施をすることができました。

本大会の運営においては、社会貢献活動に取り組み、地元の人々と交流することで、自国の現状を示す大変すばらしい機会となり、個人的にも大変やりがいのある挑

戦だったと感じています。また、旧友との絆を温めると同時に、参加年度の異なる世界中の新しい友人と出会うこともできました。

この経験を成功裏に導くために、多大な努力と情熱を注いだ実行委員の仲間から感謝しています。最善を尽くしてくださった優秀なチームの皆さんと共に、運営に携わることができたことは大きな喜びです。また、大会の準備をするに当たり、大変貴重な御支援と助言をくださったIYEO、そして国際大会に参加してくださった既参加青年の皆さんにも深く感謝いたします。次回の国際大会で皆さんと再会できることを楽しみにしています。